

皆様、おはようございます。ただいまご紹介を頂きました、ILCの議連の幹事長を務めております、衆議院議員の塩谷立と申します。

今年は度重なる台風によって被災された方々がいらっしゃいます。心よりお見舞いを申し上げるとともに、亡くなられた方々にご冥福をお祈りしたいと思います。また、東日本大震災で世界から寄せられた支援に対して、改めて感謝を申し上げる次第であります。今回のLCWSの出席者の中には、会議後、台風の被災地にボランティアとして活動をされる方々もいらっしゃると聞いております。皆様のご支援に心から重ねて感謝申し上げます。

本日は、LCWS2019におきまして、ILC国内誘致を推進する数多くの国会議員有志を代表してお話しをさせて頂く機会を賜り、誠にありがとうございます。本日は、超党派のILC議連と自民党のILC誘致実現連絡協議会から世界の研究者の皆様へメッセージとして、特に最近のILCを巡る進展について、お伝えしたいと思います。

皆様も良くご承知のとおり、今年3月7日、東京で開催されたICFA/LCB国際会議の場で、文部科学省の磯谷研究振興局長からILCに関する見解が発表されました。日本学術会議の所見を踏まえ、現時点で日本誘致の表明には至らないとしながらも、「文部科学省はILC計画に関心を持って国際的な意見交換を継続する」とするものであります。日本政府として、初めて公にILC計画に関心を示したものであり、ICFA側からもこのことは大いに歓迎されたと聞いていますが、同時に、さらに踏み込んだ表現を期待していた方々にとっては少し失望感があったことも承知しています。

ここで重要なことは、この日本政府による関心表明は、官邸はじめ、財務当局も含めた関係省庁と調整をした上での見解であることです。これは、我々議連が、ILC計画について、省庁間の枠組みを超えて「国家プロジェクト」として推進すべし、とかねてから主張してきたことでありまして、他の科学技術計画とは異なることを示しています。まさに、オールジャパン体制で、この計画を実現していきたいという考えであります。

また、当見解の中に、学術面の意義だけではなく、ILC計画がもたらす「立地地域への効果」と記載されたことは、この東北地域へのILC計画誘致を明記したものであります。わが国においては、地域の理解が政策・予算の実現に向けて大きな影響力があります。また公共財としての科学技術の意義が強く意識されている近年、立地地域への効果が明確に記載されたことは、政策上大きな意義があると言えます。これも東北地域の皆様の長年に亘る熱心な活動の成果であります。

先日、カミオカンデのある岐阜県飛騨市長他関係者とお会いした際に、飛騨市の子供たちが、地域の誇りとしてカミオカンデを理解しているとの話がありました。東北地方においても、本日出席の経済界の皆様、自治体の皆様を先頭に、連日のように様々な誘致実現に向けた取組が行われていることを承知しております。未来を担う子供たちが、夢に挑戦し、健やかに成長していくため、社会全体で後押ししていく。これは我々政治家はじめ大人の役割であります。東北地方の子供たちが将来ILCを地元の誇りとし、その計画の実現を目の当たりにすることで、新たな時代を切り拓く糧としてもらうためにも、この計画の実現に努めていく所存です。

いずれにしましても、3月7日を機に、大型国際研究所をリードするという日本にとって新しい

挑戦に対して、立法府と行政府が主体的に取り組むという新たなプロセスがスタートしたことは、政治・行政の面から極めて大きな前進と言えます。この見解に関しては、文科大臣はもちろんのこと、内閣府科学技術担当大臣、そして菅官房長官も「文科省の見解に沿う」と発言し、3月時点での日本政府としてのポジションとなっています。

3月7日以降の日本のアクションにつきましては、「経済財政運営と改革の基本方針」、いわゆる骨太方針とは、わが国において、総理の命の下、政権が進めるわが国の経済政策の基本方針であり、2019年版についても、6月21日に閣議決定されました。その中で、新しい事項として、「世界の学術フロンティア等を先導する国際的なものを含む大型研究施設の戦略的推進、最大限の産学官共用を図るとともに、民間投資の誘発効果が高い大型研究施設について官民共同の仕組みで推進する。」との文言が記載されました。また脚注で、これが「素粒子物理学」等の学術研究の大型プロジェクトを示すことも併せて明記されています。これは、まさにILC計画が該当しますし、このように政府の基本方針に明確に記載されたことは、3月7日以降も我々の取り組みが着実に進んでいることを示しています。

文科省の局長から3月7日には2つのアクションが提示されました。ひとつは、日米関係に加えて、欧州ともILCのための政府間ディスカッション・グループを設置する提案であり、もうひとつはKEKに国際ワーキンググループを設置し、国際分担に対する基本指針をまとめることです。KEKでは国際ワーキンググループの提言を先月発表しましたが、これはILC実現に向けた大きな足掛りになるものであり、議連としても高く評価をしております。

また、本年7月、参議院選挙の直前ではありましたが、我々議連メンバーは、河村会長を先頭に文部科学省審議官、KEK山内機構長と共にドイツ・フランスの政府と議会を訪問し、日独・日仏の政府間のILCディスカッショングループ設置について合意致しました。10月9日には、先ず日独ディスカッショングループの第1回会合がキックオフし、近々フランスとのディスカッショングループもスタートすべく準備中と聞いております。またドイツとの会合では、KEKの提言に基づく国際分担についての具体的議論もされており、既に何度も議論を重ねている日米ディスカッショングループに加え、それぞれの国との政府間レベルにおける財政的側面も含めた議論の進展を期待しています。

米国との連携については、ILC議連として、2013年以来のワシントンと東京での度重なる会合を経て、最近に至ってもエネルギー省のダバー次官やフォール科学局長ともILCのための会合を持ってきました。政治と行政の両面においてILCの実現に向け、日米はこれまでにない強固な関係を築いているとの認識を付け加えさせていただきます。

これからのアクションについてであります。現在、日本では学術会議のマスタープランという通常プロセスで3年に一度の大型計画に関する議論がILC計画も含めて行われています。一方、欧州では欧州素粒子物理戦略の改訂のための議論が進んでいることを承知しており、我々はこの二つの議論の行方を注視してまいります。

ILCは日本にとって国際研究機関を世界とともに実現する、そのリード役を担うという、これまでになかったことへの挑戦です。新たなプロセスを作り、試行錯誤しながら進んできました。道のりは簡単ではありませんが、いよいよ国際舞台での展開が始まっています。

ここに至って最も重要なことは、準備のための予算の確保と建設を行うための財源の検討です。政府での行政プロセスと並行して、我々は政治・立法府の立場から、準備予算の措置と建設の財源議論に向けた活動をさらに本格化していきます。

2006年のILC議連発足以来、我々は、産学官連携を実現すべく、研究者の皆様と共に、長年、計画実現に向けて奔走してまいりました。真理探究に真摯に取り組む皆様の努力の成果が、素粒子物理学の枠をはるかに超え、人類共通の課題に貢献してきたことを我々は知っています。だからこそ我々政治家は、日々現場で研究に勤しむ研究者の努力が、宇宙創成の謎を解き、人類の好奇心を満たすものとして実を結ぶことを信じ、政策を実現していくのです。

ここで、本日お集りの研究者の皆様をお願いしたいのは、ILC計画における更なるコスト削減の実現です。この大型計画を実現する上で、財源が大きな課題となる中、日々、目覚ましい技術革新の中で、更なるコスト削減における研究、議論の進展を期待しております。我々も、科学技術への投資は政治の責務として取り組んでまいります。引き続き、この壮大なILC計画を実現するための同志として、力を合わせてまいりましょう。

近年、今年ほど、国際協力、国際交流の重要性を痛感した年はありません。日本はG20を成功裡にホストしたほか、明日はラグビー・ワールドカップ決勝戦が行われます。今回のワールドカップでは、本当に多くの方々が世界中から観戦に来られ、日本を知っていただく絶好の機会となりました。そしていよいよ来年には東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。我々は、それに続く世界・人類への貢献として、ILC計画の日本誘致によるアジア初の大型国際研究拠点の建設を実現しようと決意を新たにしています。

日本では、本年5月天皇陛下がご即位され、令和の新時代を迎え、先週は即位を祝う各式典が世界180カ国を超える国々からの要人の参列の下、行われました。安倍総理は、先の国会の演説で、「新しい令和の時代にふさわしい、希望にあふれ、誇りある日本を創り上げ、次の世代へと引き渡していく」と決意を述べられました。私は、ILCは、令和の時代を迎えた日本において、世界とともに実現すべきものと信じて疑いません。

“未来を切り拓くILC”。ともに実現に向けて頑張りましょう。ご静聴ありがとうございました。

Thank you very much.